

巻頭言：戦前の帝室林野局パンフレット「木曽材」に書いてあること

ここに「木曽材」パンフレットがある。この中で、貴重なことが書かれているので、少し書き残してみたい。

1 売払場所

東京 深川区豊住町 当局豊住出張所
名古屋 南区熱田西町 当局熱田出張所
大阪 北区天満橋筋（淀川河岸）当局大阪出張所

2 公売方法

公売と特売との2種あり誰でも買い得られるようになっている

(1) 公売

- ・ 毎月1回日時を定め、一定の数量を競争入札により売り払う
- ・ 入札に附されるべき木材の樹種、伐出地、直径、長さ、品位、材積等、1口毎に詳細なる「木曽産木材明細書」を予め希望者に配付
- ・ 公売日は、毎月名古屋8日前後、東京16日前後、大阪23日頃
- ・ 入札希望者は当日入札場に参集し、入札保証金（各自見積もり金額の100分の5）を提供し、所定入札用紙に記入して入札箱に投入
- ・ 郵便を以て入札しても差し支えない場合もある
- ・ 入札保証金は開札後に返還
- ・ 落札者は落札金額の100分の10の金額を提供して売買契約書を作る
- ・ 代金は契約後60日以内に納付すべき。代金納付後は、直ちに物件の引き渡しを行う

(2) 特売

希望者に対して随時に随意契約で売買を行うことができる

こうした内容は「帝室林野局産物売払規程」に明記してある。戦後国有林の産物売払規程の原本であることは間違いない。

また、戦後爆発的に増大した原木市場販売の原形となっていると考えられる。

次に木曽ヒノキの用途の記述の中での文章を抜粋すると次の通り。もちろん米材や北洋材等で出来た家の床下が5、6年で腐ったり、板張りが2、3年でどどス黒くなったり・・・

ものよりは、幾分は高くなる。優良品を選択使用すれば相当高いものになるが、普通品を使って利用すれば実質からいえば、むしろ安い建築が出来る。（並材の説明の後）

内地杉又は米材を使用して建築せんとする住宅が既に設計済であるとして、以上の材料を要所々々に使用するように変更しても之に要する増額は総建築費

に対しては極くわずかな影響を示すに過ぎない。
このように、PRパンフレットではあるが、現在の問題となることに対するPRとあまり変化はない。

木曾ヒノキ産地の略号が次のページにあります。

(1) 伐出地を表すもの

支局	木會	野	上	妻	笠	湯舟澤	王瀧	三浦	藪原	〃
出張所	尻	殿	松	蘭	田立	湯舟澤	王瀧	三浦	小	〃
伐出地	阿寺	殿	小川	蘭	田立	湯舟澤	王瀧	三浦	小	〃
切判形	クノ	クノ	クノ	クツ	クツ	クミ	クミ	クウ	クヤ	クヤ
支局	木會	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿
出張所	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿	三殿
伐出地	柿	與	與	與	與	與	與	與	與	與
切判形	クト	クキ	クキ	クキ	クキ	クキ	クキ	クキ	クキ	クキ

備考 切判形のクは宮内省の意なり。

トピックス1：県議会での増築論議 —増築は必ず同じ構造でなければならないか—

A 県議会で、県立大学管理棟増築問題の基本設計費で議会が予算案を差し戻した。

既存の管理棟が鉄筋コンクリートの耐火建築物であるため、増築部分も耐火構造にしなければならず、木造の耐火建築物が県内の公共施設にないため、鉄筋コンクリートで基本設計費を要求したもの。しかし、県議会は、県産材利用が大きな流れであり、県産材を利用した木造建築にすべきと全会一致で予算案を認めないとしている。

公共建築物等木材利用法で都道府県の方針が全県で出されているが、県議会が方針に従って基本設計の段階でチェックしているのは、非常に重要かつ意義深い。

木材利用方針が出された後の公共建築物の発注状況を見れば、確かに低層で面積の小さいものの木造化や新築物件の木造化は進んでいるが、低層で面積の小さいものでも増築物件は全くと言っていい程、既存の構造に合わしている。既存建物構造がRCであれば増築はRC、SであればSである。この事例は、その象徴である。また、木造準耐火や木造耐火建築物が建築可能であることも、地方公共団体、国の出先機関等地方での理解は進んでいない。

国交省官庁営繕部がこの基準づくりをしていることを地方にも大きく発信する必要がある。各都道府県や各市町村にも林業活性化議員連盟があり、全員加入のところもある。是非、今回のような基本設計段階からのチェック機能を発揮されるよう期待してやまないし、増築物件についても単純に構造を決定してほしくないものである。

※A 県立大は、すべて英語の授業で、就職率も高く、全国的評価は急上昇の大学で建物としても図書館の木質化では有名である。

トピックス2：素材生産業の過去と現在 —立木買いと請負で同じ仕事をするのか？—

素材生産業は、過去から森林所有者から立木を買い取って、自ら伐採搬出して販売して生計を立てていた。当然利益を出すには、立木代金を安くするか、伐採搬出経費を押さえるか、販売総額を増やすかの3つの途がある。立木経費を押さえるには、家計的に厳しくなった家に現金を積んで立木代金を安くするとかつては言っていた話を聞いたことがある。伐採搬出経費を下げるには、林道をつけてもらうとか索張り専門業に索を安くはってもらうとか様々な工夫をしていた。でも、最大は販売総額をいかに増やすかにある。そのため、原木市場の価格動向を広域に把握して、アカマツは〇〇市場、ヒノキは〇〇市場、スギは〇〇市場と使い分けをするだけでなく、大量な注文が入っている会社が盛んに買っていれば、市場を変更したり、日々価格が上がっている時には、トラックを途中で止めて、次回の市へ回したりしていた。それでも、山主さんに信用を得るため、もうかった時には、後で現金の追加払いをして、次の取引をスムーズにするための工夫も行っていた。

こうした時代でも、山主さんによっては、伐採搬出費だけを支払って委託する方式もあり、森林組合作業班には、こうした形態が多かった。国有林の委託もこの流れをくんでいる。今年度から、採材と仕分け方針を変更したが、請負の素材生産業から立木販売で自ら素材生産している方式に近づいたと言われ、ビミョーな感じである。根張りの付け方や杭丸太の搬出、広葉樹の採材等である。請負の会社としては、自分ならこうするのにとというのが、請負は指示通りである。逆に、請負の仕事の中で、なる程と思われて、民有林にも活用できるようにしなくてはならない。そのためには、かつての素材業者がそうだったように、広域でしっかりした需給情報を把握するとともに、売りにくい材種の販売先を育成し、地域産業の確立、自給率向上への貢献をしていかななくてはならない。

課題1：仮囲い問題を考える

大規模建築や再開発には、その周囲を仮囲いがつくられる。仮囲いは、ほぼ100パーセント鉄板等で端に丸みがつけられ、丸みで合わせて隙間がないように造られる。そしてその殺風景さをカバーするため、緑の木が描かれることが多い。どういう訳か花でなく緑の木である。時には近所の学校の子供の絵が掲げられる場合も多い。更に3年を超える工事だとつる性植物の苗が植えられ緑のカーテンとする場合もある。このような工夫をするには、鉄板だけでは、「ちょっと」と作設側もわかっているということだ。

それなら、いっその事木で造って環境に優しいとPRした方が手っ取り早い気がしてならない。そのため、自給率50パーセントを目指す用途の中には仮囲いの欄を設けて、新たな用途としている。技術開発の予算もつけられている。仮囲いの日本全体の量は膨大である。

しかし、全く事例が無い訳ではない。東京の都心部の鉄道の駅工事等では、木の板をデザイン的に組み合わせて仮囲いをしている。駅ということで、街の景観に配慮したということだろう。仮囲いの目的は、防犯、安全、防塵、遮断、遮音であるので、木に問題があるわけではない。一部に放火に耐えられないとの声もあるが、プラスチックの製品も出ているので同じである。プラスチックの仮囲いメーカーのカタログには、環境性がよい、再生資材を使いCO2削減に貢献とある。さすがに鉄に比べてすごいPRである。それならCO2固定効果が世界で認められている木材を使うのが理にかなっている。CO2固定と固定量を明記した製品を販売すれば効果的である。リース業界が建設重機だけでなく林業機械のリースを兼務しているように、こちらもリース業界を巻き込めば需要が大きく伸びると考えられる。とりあえず、北陸新幹線の駅工事も本格化するので、ここから始めよう。

課題2：続き間と冠婚葬祭 —最も高級品を使った場所は今—

前回「ヒノキは何故売れないか」の中で、続き間が少なくなった理由として、家では冠婚葬祭をしなくなったことを理由として挙げた。親族が一同に会する風習が消えてしまったかといえそうではないが、続き間だけでなく、一の膳から三の膳までのお膳や各種漆器や絵皿等も全く使われなくなり、〇〇町歴史博物館の展示物ともなっている。

では、冠婚葬祭どこで代替するかといえば、葬式はセレモニーホール、結婚式はホテル併設の式場で披露宴はホテルである。法事は、旅館や貸座敷である。続き間の座敷のある和室が最も高い国産材の用途先であったことからすれば、この代替施設に国産材の利用が望まれるのは当然の流れだが、全くといっていい程使われることはない。

セレモニーホールに至っては、余計な装飾をせず、木は全く使われない。地方ではJA経営のものが多く、構造も非木造である。畳の部屋ももちろんあるが、役物どころか、地域の材も使っていない例が多い。

ホテル併設の教会も一緒である。一方、古い教会は木造で内装も結構こった木材が使われている。

一方、ホテルやセレモニーホールでの食事場所もテーブル、イス、食器に至るまで、かつてのような最高級品ではない。まあ、テーブルクロスやカバーで洗えるもので隠すし関係ないかもしれないが。木箱入の記念品も見かけなくなった。

人世の始まりと終わりの記念の場所は、もう少し何とかならないかと思う。国有林で不用になって売り払った貯木場跡地にも鉄骨造のセレモニーホールが建っている。残念！

木材のいにしえを探るシリーズ2：

—国有林で活躍した林業機械メーカーは今どうなったか？—

日本で初めてアメリカのボールドウィン工場に森林鉄道用の蒸気機関車を発注したのは1913年（大正2年）である。今年は2013年だとすると、ちょうど100年前に当たる。実際に走ったのは2年後であるが、それを記念して、国有林で活躍した林業機械メーカーのその後を見てみよう。

森林鉄道で有名なのが、雨宮製作所。1907年に創業し、鉄道経営に自家生産し安く供給するために始めた。後に鉄道経営部門と合併し大日本軌道と合併したが、関東大震災で工場が壊滅し、昭和初期に姿を消した。

次に、立山重工業から蒸気機関車を購入している富山市に本社工場があったが、戦後大谷製銅所富山工場となったが、解散し工場は大谷製鉄となったが新湊市に新工場を建設し現在富山工場はない。

次に登場するのは、酒井工作所である。酒井工作所は1949年（昭和24年）設立で酒井重工業と名前を変え、建設機械メーカーの大手として東証一部に上場している。

今度は集材機メーカーをみてみよう。当然当初は輸入品だが、最初に登場するのは、森藤鉄工所で昭和6年に国産初のガソリン集材機が納入されている。大正5年に森藤鉄工所として川口市に創業している。この会社は現在も株式会社モリトウとして林業機械を作っている。

次は、何と言っても富士産業株式会社岩手工場である。自動遠心式クラッチを組み込んだY型集材機である。元々は富士産業（今の富士重工業）の疎開先の工場であったが、戦後中島飛行機の技術者いわゆるスバルが平和産業創設のため協力して、岩手富士産業となり、現在はイワフジとして、引き続き林業機械メーカーとして活躍している。

次は、南星工作所でアベックキャリアを使用するエンドレスタイラー式の集材機である。こちらも熊本県菊池市にあり、現在も南星の社名として林業機械メーカーとして活躍している。

この他に森林鉄道関連では協三工業があり、福島市に本社があり、現在でも小型ディーゼル機関車や遊園地の小型鉄道車両をつくっている。社名は毛利元就の3本の矢に由来し、3兄弟が一致団結して事業に当たるとの意味である。加藤製作所の名前もある。こちらは現在品川区に本社を持ち各種クレーンを中心に機械メーカーとして東証一部に上場している。

引き続き林業と関わりのある会社もあるがそうではない会社もある。どちらにしても、かつての協力に感謝し、引き続きの会社の隆盛をお祈りします。

編集後記：

長野市の隣に須坂市がある。蔵の街として有名だが、核心地区でないその周囲を歩くと別のことに気がつく。それは、木の塀と住宅の下見板である。古い街には必ずあるものだが、新築されたもの、修繕されて新しくなっているものが、そこかしこに見られる。それが本来の観光スポットではない、周囲にはずっと広がっている。木の塀でなければ、樹塀となっている。ブロック塀や鉄アルミの塀でもない。ちゃんと現代に息づいていて、街を美しく見せている。焼スギもあり、窓格子も木製ドアも看板も新品の木材である。地域で一体的に取り組めば、街並みきれいである。こうした製品を作り続けている人、施工を続けている人がいるのは、産業としてもうれしい限りである。ずっと歩いて観察すると木の塀に屋根がついている木塀、家のひさしの長い下見板は明らかに長持ちしている。雨という大敵に応じた建築が息づいている。残念ながら、駅前は昭和的で全国と同じで、駅から架かる歩道橋は木に似せてあったのは心残りである。

もう一つ心残りがあった。家の前のカーポートだけは既製のどこにでもあるものが妙な感じで建っている。